

‘エクセルシア’ 考
ディケンズとロングフェローの一接点
‘Excelsior’: A Motto Connecting Dickens and Longfellow

寺内 孝
Takashi TERAUCHI

序

ディケンズは 2 度訪米し、最初の訪米の 1842 年、ロングフェローと終生の交流が始まる。この当時ディケンズは既に人気作家であったが、ロングフェローは詩人としてはまだ駆け出しであった。そのような間柄であったが、ディケンズは最初の出会いでロングフェローから運命的な詩『エクセルシア (*Excelsior*)』を得る。本稿では、最初にこの語の由来と語義の拡大、第 2 にこの語のイギリスへの伝播と受容、第 3 にディケンズとロングフェローの邂逅と交流、最後にディケンズと「エクセルシア」の関係それぞれ考察する。

1 ‘excelsior’ の由来と語義の拡大

OED によれば、‘excelsior’ という語は、「高い(high)」を意味するラテン語 ‘*excelsus*’ に由来し、その比較級が ‘excelsior’ で、‘higher’ を意味する。この語が英語に移入されたのは 1778 年で、ニューヨーク州議会上院が、日の出の図案に ‘Excelsior’ の標語を添えた盾を州の章 (seal) としたのが始まりである。州章の制定により、同州の銅貨 (1787 年発行) などにもその標語が刻銘され、ニューヨーク州は ‘The Excelsior State’ の異名をとる。この標語こそ独立革命を達成した 13 の植民地の人々にとって喜びと希望を体現する言葉だったのだ。

「エクセルシア」という標語が社会にいつそう定着するのは 1841 年以後で、この年にヘンリー・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882) がニューヨーク州の州章をつけた新聞の見出しに想を得て、*Excelsior* という詩を発表したからだ。その第 1 スタンザは以下のものである。

The shades of night were falling fast,
 As through an Alpine village passed
 A youth, who bore, 'mid snow and ice,
 A banner with the strange device,

Excelsior!

(*Poetical Works* 19)

夜影すばやく落ちぬ、
 若人ひとり雪氷の中、
 見知らぬ図柄の旗もちて
 アルプス山脈の村越えしときに、
 エクセルシア（もっと高く）！

ロングフェローはこの詩で、形容詞 ‘excelsior’ をラテン語文法では語法違反（破格）(solecism) となる副詞の意味で用い、擬似間投詞 (quasi-int.) の反復語としている。かれがこの語を、語法違反に気づくことなく使用した理由は、ニューヨーク州の標語 ‘Excelsior’ が一般には副詞的に「より高く」、「上へ向かって (upwards)」の意で受け止められていたからである。誤用を指摘されると彼は、‘Excelsior’ は ‘*Scopus meus est excelsior*’ (‘My goal is higher’) の最後の単語だと説明したという (*Poetical Works* 19; *OED* s.v. *Excelsior*) 。

こうした経緯から *OED* は、ニューヨーク州の標語の語法が誤りなのか、あるいはそれが文法的に許容される文の省略法と意図されたのかは明瞭でないとコメントし、ロングフェローの ‘Excelsior’ をこの語の第 2 用例に掲げている。

前述のように、‘excelsior’ の副詞的用法は誤用ないし文の省略法で始まったのだが、この語法はのちの作家の好むところとなり、多用される。またこの語は、すでに示唆したように、アメリカの時代精神を反映した語であったから多方面で愛用される。商標 ‘Excelsior soap’ はその一つで、*OED* はこれの初出を 1851 年の第 1 回ロンドン世界博のカタログ中に見出し、アメリカ出品の ‘Excelsior soap’ を登録している。

‘Excelsior’ という語は 1857 年以後いっそう深く浸透する。ロングフェローの詩にマイケル・バルフ (Michael Balfe) という作曲家が曲をつけ、大学歌として愛唱されるようになったからだ (*Americana* q.v. *Excelsior*) 。

1868 年に第 3 の語義が生み出される。詰め物の緩衝材に用いる木屑（木毛）が ‘excelsior’ という商品名で通るようになったからである。第四の語義は、極小の「3 ポイント活字」(3 x 1 point [0.35146mm] = 1.05438mm) に適用される。イギリスで 1890 年以来「ミニキン (minikin)」と呼ばれた活字が、アメリカで 1902 年以後、商標名の ‘excelsior’ が一般名として通るようになったからだ (*Stein* s.v. *Excelsior*) 。

「エクセルシア」の使用をなおいえば、995.2 カラットの巨大ダイヤモンドが 'Excelsior diamond' と名づけられたし、ミズーリ州では 'Excelsior Springs' という町名が現れた (*Britannica* 7: 359; 15: 594) .

2 'excelsior' のイギリスへの伝播と受容

このようにラテン語からの借用語 'excelsior' は、1778 年にニューヨーク州で標語に採用されて以来、あたかも時代の寵児のように持てはやされる。そしてその語は、アメリカ人の自信と希望の気概をたたえてイギリスに伝えられる。イギリスでこの語がいつごろから一般受けするようになったかは定かでないが、*OED* の掲げる諸用例から推測すれば、ロングフェローの *Excelsior* (1841) 以後であろう。

この当時、イギリス社会はカトリック教徒解放 (1829) , 選挙法改正 (Reform Act, 1832) , 工場法制定 (1833) 等々に見られるように、改善・改革 (improvement; reform) の時代であった。エイサ・ブリグズ (Asa Briggs) はこの時代を、著書の表題で 1783 年から 1867 年まで、すなわち、小ピット (William Pitt) がイギリス史上最年少の 24 歳で首相に就任する年から、第 2 次選挙法が改正されて選挙権がいっそう拡大される年までとしている (*The Age of Improvement 1783-1867*) . この時期こそ改善・改革の運動がもっとも顕著に見られたのだ。ゆえに標語「エクセルシア」は容易に浸透したと思われる。運動の目指す方向はおのずと「エクセルシア (より高く)」であるからだ。

この運動には多くの政治家や慈善家がかかわっている。とりわけロバート・オーウェン (Robert Owen, 1771-1858) は著名で、「社会にかんする新見解」(1813) や「ニュー・ラナーク住民への講演」(1816) で労働者階級の生活と性格の「改良、改善 (amelioration or improvement)」「矯正 (correction)」を強調する。以下はかれの主張の数例である。

[. . .] a sincere and ardent desire to ameliorate the condition of the subjects of the empire [. . .]; [. . .] the formation of character and general amelioration of the lower orders. / This Institution [. . .] is intended to [. . .] effect a complete and thorough improvement in the *internal* as well as *external* character of the whole village. (Owen 36-37; 98) (下線筆者)

オーウェンの他には、ウィリアム・アレン (William Allen, 1770-1843) , フランシス・プレイス (Francis Place, 1771-1854) , ウィリアム・ラヴェット (William Lovett, 1800-1877) らもこの運動に大きく貢献したが、ディケンズも例外ではない。例えばかれは 1846 年 6 月 20 日付の書簡で「庶民の性格向上、住居の改善」

(‘the elevation of their character, the improvement of their dwellings, their greater protection against disease and vice—’ 下線筆者) (Tillotson 566) を言っている。また、ディケンズの作品から ‘improve’ という語の使用例をいくつか拾い上げれば以下のものがある。

an improving party (*Hard Times*. 1854. Bk. 1, ch. 2); improve their livelihood. Then, why don't they improve it, ma'am! (*Ibid.* Bk. 2, ch. 1); of improving dear Joe (*Great Expectations*. 1860-61. Ch. XIX); a sagacious way of improving their minds (*Ibid.* Ch. XXIII); ‘I [. . .] have had time since then to improve.’

(*Ibid.* Ch. XXXV) (下線筆者)

世はまさに改善・改革の時代だった。そして人々 (Victorians) は世俗的であれ、非世俗的であれ、「より高く」「もっと高く」を志向する傾向にあったのだ。世俗的な ‘higher’ を目指した人物像については、ディケンズが『大いなる遺産 (*Great Expectations*. 1860-61)』で描出している。そこでは孤児のピップ (Pip) が社会的地位の上昇を憧憬して紳士を目指したし、ポケット夫人 (Mrs. Pocket or Belinda) は『貴族名鑑』を愛読書とした。そして、ディケンズの同時代人サッカレー (Thackeray) は、ポケット夫人のような、『貴族名鑑』を「第2の聖書 (second Bible)」とするような人物を「俗物 (snob)」と呼んで揶揄したのだ (Thackeray 18)。またサッカレーが『虚栄の市 (*Vanity Fair*. 1847-48)』で描いたベキ (Becky or Rebecca Sharp) は、さしずめ前述のピップの女性版である。社会的地位の上昇を志向したのは単に俗人ととどまらない。聖職者も同様で、一般聖職者は主教位を、主教はより高位の主教位を目指したのだ (ムアマン 366)。

世俗的な上昇とは対照的に精神的、道徳的、社会的な向上を志向した人たちがいる。先述のオーウェン、それに囚人を慰問したクエーカーのエリザベス・フライ (Elizabeth Fry, 1780-1845)、キリスト教的紳士 (a Christian gentleman) の育成に尽力した教育家トマス・アーノルド (Thomas Arnold, 1795-1842) (Willey 56)、哲学的急進派で社会主義に傾斜していったジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-73) (ミル 80) らが例示されてよい。小説上の人物では、ジョージ・エリオット (George Eliot) が描いたメソディストの女説教師ダイナ・モリス (Dinah Morris) (*Adam Bede*. 1859)、上記『大いなる遺産』のジョー (Joe) らがあり、さらに利他的で自己否定・自己犠牲という高尚さを示した小説中の人物をいえば、ディケンズ著『鐘の精 (*The Chimes*. 1844)』のメグ (Meg or Margaret)、『炉辺のこおろぎ (*The Cricket on the Hearth*. 1845)』のピアリピングル (John Peerybingle)、『二都物語 (*A Tale of Two Cities*. 1859)』のシドニ・カートン (Sydney Carton) らがある。

また自己否定・自己犠牲などを意味する言葉，‘self-sacrifice’ (1805) ‘self-sacrificing’ (1817) ‘self-renunciation’ (1791) ‘self-renounced’ (1838) ‘self-devotion’ (1815) ‘self-abandonment’ (1818)，さらに「自助」などを表す ‘self-help’ (1831) ‘self-development’ (1817) ‘self-education’ (1831) ‘self-devotion’ (1815) (括弧内 OED 初出年) などは，大抵が 19 世紀初期の造語であることを思えば，これらの言語自体が，少なくとも 19 世紀前半の精神の上昇傾向を示す資料となっている。

このようにディケンズの生きた時代は上昇志向の時代であり，同時に改良・改善・改革の時代でもあった。ゆえに標語「エクセルシア」が浸透する沃土があったと言えるし，同時にこの標語そのものがイギリス人の精神をその方向へと収斂するのに少なからぬ働きをしたとも見られるのである。あるいは，「エクセルシア」は，時代によって待望された言葉，時代精神を的確に言い表す言葉だったと言える。

ロングフェローの *Excelsior* 以後におけるこの語の使用例を挙げれば，筆者の手元には 1865 年ロンドンで刊行の *Excelsior* という表題の小雑誌があるし，アントニー・トロロプ (Anthony Trollope) の小説『三人の役人』(1858) に次の用例がある。

His motto might well have been ‘excelsior!’ if only he could have taught himself to look to heights that were really high.

(*Three Clerks* I. xi. 244; OED s.v. *Excelsior*)

標語「エクセルシア」はロングフェローの詩の追い風をうけて社会に容易に吸収されていったのだ。

3 ディケンズとロングフェローの邂逅と交流

ディケンズもまたこの語に通じている。かれがこれを明確に認識したと思われる時期は遅くとも，ロングフェローが *Excelsior* を発表した翌年，つまり初渡米の 1842 年のことで，以下の経緯でかれはこの詩に遭遇する。

この年の 1 月 22 日，当時 29 歳のディケンズはアメリカですでに知名であったことから (House 1: 431n.; Payne 3-5)，マサチューセッツ州ボストンに到着するや，公私のパーティや舞踏会などに招待されるなどして大歓迎を受け，首都ワシントンではジョン・タイラー (John Tyler) 大統領の歓迎までも受ける (House 3: 111&n., 115-17; Slater 81-84)。この間にアメリカ国民文学第 1 次創成期の人たち，すなわちワシントン・アーヴィング (Washington Irving)，ハリエット・ビーチャストウ (Harriet Beecher Stowe)，エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe)，オリバー・ウェンドゥル・ホウムズ (Oliver Wendell Holmes)，ヘンリー・ロングフェロー

らと交わるが、とりわけ容貌が酷似するといわれた5歳年上のハーバード大学教授ロングフェローとは深い交流が始まる (Schlicke 14; Dana 56-57) .

当のロングフェローは、ディケンズ訪米前の1836年、欧州留学中にディケンズの月刊分冊小説『ピクウィック・クラブ遺文録』に魅せられ、同年12月に帰国後、“ピクウィック・クラブ”を模して、“5人クラブ (the Five of Clubs)” を結成する (Dana 55-56; Longfellow 1: 243-44) ？ それほどまでにディケンズ・ファンとなった彼は、42年のディケンズ初渡米のとき、初めて身近に接して父への書簡で、「すごい人、…陽気でくったくのない性格」と記す (Longfellow 1: 397; House 3: 39n.) . この邂逅以来ロングフェローにとってディケンズは、その才能と資質のために余人をもって代えがたい人となる (Wagenknecht, Longfellow 18) .

他方、ディケンズはジョン・フォスター (John Forster) への書簡の中で、当時イギリスでほとんど無名であったロングフェロー (出世作 *Hyperion* [1839], *Voices of the Night* [1839]) を (Forster 1: 257) , 「すぐれた著述家であると共に率直で才芸豊かな人」と見抜くとともに、自分が入手した「アメリカ詩の本 (‘a book of American Poetry’)」に掲載されたロングフェローの詩 (*The Village Blacksmith* と *Excelsior*) が「非常によい」と評し、ロングフェローを「アメリカ詩人の中でベスト」と絶賛する (House 3: 96, 266, 340, 349) ？ そしてディケンズはニューヨーク滞在中の42年2月、ロングフェローに書簡を送り、イングランドに来ることになれば立ち寄るよう誘いかける (House 3: 78) . ディケンズは初対面のロングフェローに精神的な深さを洞察したのであろう .

こうしたことがあって、ロングフェローは同年 (42年) 10月に訪英し、同月5日から20日までの間、ロンドンのデヴォンシャ・テラスでディケンズの客となる⁴ .

その後ディケンズは、第1回訪米から25年後の1867年11月19日に2度目の訪米を果たし、76回にわたる朗読会を催す (Schlicke 17; Page 128) ？ この間にロングフェローと会食などをし (Storey 11: 480-81; Payne 157, 178; Dana 87) , ジェイムズ・フィールズ (James Thomas Fields, ボストンの出版人) 邸におけるロングフェロー61歳の誕生パーティ (68年2月27日) にも招待される . だが、誕生パーティへは風邪をこじらせて出席できなかったために、ロングフェローに同日付の書簡を出し、祝意を表すとともに、「この夏、あなたをギャズ・ヒルに迎え、誠心誠意の歓迎をしたい」と記す (Storey 12: 61; Payne 223; Dana 94) . 他方ロングフェローは、既に教授職を退いていたこともあり、ディケンズの朗読会には大抵出席する (Dana 92) .

ディケンズはこの訪米旅行を68年4月22日に終え、ニューヨーク港を起航して5月1日に帰国する . そして6月、ロングフェローは、ディケンズの後を追うようにして総勢10人で訪英し⁵、湖水地方とケンブリッジを経由して26日

にロンドンのランガム・ホテルに到着する．すると直ぐに招請状，挨拶状，招待状，歓迎状が来る．今や，エクセルシアの人ロングフェローは，高名な詩人だったのだ (Storey 12: 141n.; Longfellow 2: 440, 443; Dana 97) ．

ディケンズは 30 日午前に娘ケイトを伴ってランガム・ホテルに来る．だがロングフェローに先客があって十分に会えなかったらしい (Storey 12: 141, 143) ．かれらが再会するのは 7 月 4 日 (土) 夜のことで，ロングフェローが娘 3 人と義理の兄弟を伴って総勢 5 人 (10 人でなく) でギャズ・ヒル邸を訪れ，翌日曜日，ディケンズの歓待をうけ，6 日 (月) 午前に辞去する．

ディケンズはこの日曜日のことをボストンの出版者，J. T. フィールズ氏への 7 日付の書簡で，「私たちは皆，本当に“楽しいとき”を過ごしたと思う」と記す (Dana 99-101; Storey 12: 148-49) ．他方，ロングフェローの孫息子ダイナ (Dana) もまた，1943 年の論文でその訪問を「楽しい 3 日間の週末」と記している．だが，ダイナのいう「楽し」さはロングフェローの娘たちの日記などに依拠したものであって，ロングフェロー自身の資料によるものではない．この論文にはディケンズ邸におけるロングフェローの反応は全く記されていない．

これとは別に，ロングフェローの 12 歳年下の弟サミュエル・ロングフェロー (Samuel Longfellow) が 1886 年に著した『ロングフェロー伝』では，「ロングフェローは娘たちとギャズ・ヒルで日曜日を過ごした」とあるだけで，招待者であり，兄の親友であり，兄たち 5 人を 2 泊もさせた当主の人気作家ディケンズには全く言及していない．⁷ この扱いに比して，ロングフェロー一行が，ハンブシャー州ワイト島在住の桂冠詩人テニソン邸を総勢 10 人 (5 人でなく) で訪問 (7 月 15 日～17 日) するとき，「テニソン氏宅への 2 日間の楽しい訪問があった」(傍点筆者) と記し，ディケンズ邸訪問のときとは異なる書き方をしている (Longfellow 2: 443-45) ．

二人の間には何か感情的な齟齬があったのかもしれない．そうした憶測に，前述のフィールズ氏の夫人の日記 (1870 年 5 月 24 日付) (Wagenknecht, “Dickens” 16) やロングフェローの書簡 (78 年 4 月 20 日付) (Storey 12: 148-49n.; Wagenknecht, Longfellow 21) は現実味を与えてくれる．だがそうであったとしても，それが決定的なものでなかったことは，次のことから理解できる．

ロングフェローがまだワイト島に滞在していた 7 月 20 日，かれはディケンズの友人フォスター宛ての書簡で，ロンドン滞在中のフォスターの歓待に謝意を表わすとともにその書簡を，「フォスター夫人とギャズ・ヒル邸のディケンズにどうぞ宜しく」と結んでいるからである (Dana 102-03) ．さらに次の資料も先人の理解を助けてくれる．

ディケンズは 2 度目の訪米後に，「新聞販売人たちの慈善協会 (News vendors'

Benevolent Institution) 」の代表に就任するが、その協会が 70 年 4 月 5 日に年 1 回恒例の晩餐会を開催したとき、かれは「…寄付者と副会長のリストにロングフェローの偉大な名を記載する光栄を得た」と報告して喝采を浴びる (Fielding 419) . ディケンズの死はこの 2 ヶ月後 (6 月 9 日) のことであるから、一時期、感情的なもつれが仮に介在したとしても、彼らの友情は終生崩れることはなかったのだ .

ディケンズの訃報に接したロングフェローは弟アレグザンダー (Alexander) への書簡で、「ディケンズのことは自分の頭からめったに離れない . 世間の大損失だ」 (1870 年 6 月 19 日付) と記す (Hilen 5: 356; Wagenknecht, “Dickens” 17; Wagenknecht, *Longfellow* 20) . ロングフェローにとってディケンズは、ワーゲネクト (Edward Wagenknecht) が指摘するように、「すべての小説家の中でいちばん大切な人」だったのだ (Wagenknecht, “Dickens” 19) .

4 ディケンズと「エクセルシア」

「エクセルシア」という標語に関していえば、既述のように、ディケンズは、42 年のロングフェローとの初対面のときに確かに認識している . それ以来、あるいはそれ以前からか、かれはこの標語に強く印象づけられたことに疑いない . かれはこの標語を、第 1 回訪米から 15 年後の 57 年 11 月 5 日の講演で次のように使用しているからだ .

I am happy to say, around me, and they have a funded capital of almost £14,000.
This is wonderful progress, but the aim must still be upwards, the motto always
'Excelsior'. [*Cheers.*] (Fielding 243)

このようであるから、「エクセルシア」「モットーはつねに“より高く”」はディケンズの中で、遅くとも 1842 年に記憶され、以後長く留保されて座右の銘のように機能したと見られるのである . そしてかれ自身当然のごとく「より高く」に向かって変革する . その一面をかれの小説面で考慮すれば、笑劇 (farce) 的な事件が連続するピカレスク小説に飽き足りなくなり、登場人物を精神的により高い存在へと向上させるビルドゥングスロマン (教養小説, 発展小説) へ向かったのである . その変革の陰に、かれが「アメリカ詩人の中でベスト」と賞賛し、作品を通じてかれに「エクセルシア」を印象づけ、その標語を、終生の交流を通じて脳裏に焼き付けることとなった畏友ロングフェローにそれ相応の役割があったことを思わずにはおれない .

注

本稿はディケンズ・フェロウシップ日本支部 2002 年度秋期大会 (10 月 5 日, 於甲南大学) において口頭発表した原稿に加筆修正したものである。

- ¹ Bosanquet, S. R. *Excelsior*. London: Hatchard and Co., 1865.
- ² ここでいう ‘Club’ とは, ‘a yokel (田舎者)’ (*Webster 2*) ほどの意味であろう。
- ³ 「アメリカ詩の本」とは Griswold, Rufus. *Poets and Poetry of America* (1842) と見られており, ここに *The Village Blacksmith* と *Excelsior* (共に 1841) が収録されていた (House 3: 266 & n.)。デヴォンシャ・テラス (Devonshire Terrace) 1 番地のディケンズ旧宅 (39 年 12 月 ~ 51 年 11 月居住) の ‘Inventory of the Books’ にはロングフェローにかかわる次の書籍が含まれる。Griswold, R. W., ed. *Poets and Poetry of America* (1842); Longfellow. *Hyperion* (1839), *Voices of the Nights* (1839), *Ballads and Other Poems* (1841)。この最後の書 *Ballads and Other Poems* にも *Excelsior* と *The Village Blacksmith* が収録されている (Tillotson 720-722)。ディケンズの書架に並べられた *Ballads and Other Poems* はおそらくロングフェローから贈与されたものであろう (Dana 82)。
- ⁴ ロングフェローは 3 度ディケンズの客となっている。2 度目は 56 年, 3 度目は後述の 68 年で, 2 度目の滞在に関する言及は Hardwick, Michael and Mollie. *The Charles Dickens Encyclopedia*. Oxford: Osprey Publishing Limited, 1973, 233.
- ⁵ ノーマン・ペイジは第 2 回訪米中の公開朗読会の回数を 75 回としているが (Page 128), シュリックケにある 76 回が正しい (Schlicke 17)。詳細は Storey 11: 534-35; 12: 709-10 参照。
- ⁶ 10 人の内訳はロングフェローと娘 3 人, 息子 2 人, ロングフェローのきょうだい 3 人 (女 2 人と男 1 人), 亡妻の兄弟トマス・G・アプルトンである (Thomas Gold Appleton) (Dana 102)。サミュエルの『ロングフェロー伝』では 9 人しか確認できないが, デイナの論文にあるように, 5 人の子どもすべてが訪欧の旅に伴われたと見てよいだろう (Longfellow 2: 123, 440)。ちなみにロングフェローは, 2 番目の妻フランシス・エリザベス・アプルトン (Frances Elizabeth Appleton) との間に 6 人の子どもをもうけたが, 内 1 人は早世した。
- ⁷ サミュエルは, 兄の 2 週間のロンドン滞在の日程を, ディケンズ邸訪問を含め, ウィンザー城の女王訪問, 皇太子訪問, ウェストミンスター寺院の夜の礼拝出席と主任司祭邸での茶会, ランベス宮殿のカンタベリー大主教訪問, ランガム・ホテルでのロングフェローのための大晩餐会 (各界の名士数百人が参加) 等概略的に記している。この記述からロングフェローは人気詩人としてロンドンで大歓迎を受けたことが分かる。ちなみに, ロングフェローの詩は当時イングランドで相当に愛読されていて (Dana 90), ヴィクトリア女王はかれに, 「あなたは, 私どもの台所の召使いたちによって名前が知られている唯一の現代作家です」 (68 年 7 月 4 日) と言っている (Dana 98)。

参考文献

Dana, Henry Wadsworth Longfellow. “Longfellow and Dickens: The Story of a Trans-Atlantic

- Friendship.” *Cambridge Historical Society*. 28 (1943): 55-104.
- Encyclopedia Americana*. New York. 1966 ed.
- Encyclopaedia Britannica*. Chicago, etc. 1966 ed.
- Fielding, K. J. *The Speeches of Charles Dickens*. Hertfordshire: Harvester-Wheatsheaf, 1988.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 2 vols. London: Everyman’s Library, 1969.
- Hilen, Andrew, ed. *The Letters of Henry Wadsworth Longfellow*. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1966-1982.
- House, Madeline, and Graham Storey, eds. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 1. Oxford: Clarendon, 1965.
- House, Madeline, Graham Storey, and Kathleen Tillotson, eds. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 3. Oxford: Clarendon Press, 1974.
- Johnson, Allen, ed. *Dictionary of American Biography*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1964.
- Longfellow, Samuel. *Life of Henry Wadsworth Longfellow*. 2 vols. Boston: Ticknor and Company, 1886.
- Murray, James A. H., et al. *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon, 1933, 1989.
- Owen, Robert. *A New View of Society and Other Writings*. London: J. M. Dent & Sons, 1927.
- Page, Norman. *A Dickens Chronology*. London: Macmillan, 1988.
- Payne, Edward F. *Dickens Days in Boston: A Record of Daily Events*. Boston and New York: Houghton Mifflin, 1927.
- The Poetical Works of Longfellow*. Boston: Houghton Mifflin, 1975.
- Schlicke, Paul, ed. *Oxford Reader’s Companion to Dickens*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Slater, Michael. *Dickens on America & the Americans*. Austin & Boston: U of Texas P, 1978.
- Stein, Jess. *The Random House Dictionary of the English Language*. New York: Random House, 1966.
- Storey, Graham, ed. *The Letters of Charles Dickens*. Vols. 11, 12. Oxford: Clarendon, 1999, 2002.
- Thackeray, W. M. *The Book of Snobs*. 1846-47; Gloucester: Alan Sutton, 1989.
- Tillotson, Kathleen, and Nina Burgis, eds. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 4. Oxford: Clarendo, 1977.
- Wagenknecht, Edward. *Longfellow: A Full-Length Portrait*. New York: Longmans, Green & Co., 1955.
- . “Dickens in Longfellows [sic] Letters and Journals” *The Dickensian*. 52 (1955): 7-19.
- Willey, Basil. *Nineteenth-Century Studies*. Cambridge, etc.: Cambridge UP, 1980.
- ミル, ジョン・スチュアート 『ミルの大学教育論』 お茶の水書房, 1983 .
- ムアマン, J. R. H. 『イギリス教会史』 聖公会出版, 1991 .